

震災情報から考えるメディア・リテラシー教育の実践

東京都立江北高等学校 情報科主任教諭 稲垣 俊介
鳥取県情報教育サポーター 今度 珠美

1. はじめに

1.1 問題の所在

日本は震災の多い国の一つである。近年において大震災と呼ばれる震災は1995年1月に発生した「阪神・淡路大震災」、2011年3月に発生した「東日本大震災」、特に記憶に新しいのは、2016年4月以降相次いで発生している「熊本地震」がある。阪神・淡路大震災が発生した1995年では、スマートフォン(以下「スマホ」)はほぼ使用されておらず、東日本大震災が発生した2011年では、高校生のスマホの普及率は総務省(2016)によると7.2%である。次いで熊本地震が発生した前年(2015年度)の普及率が93.6%であり、2016年もほぼ同程度と考えれば、2011年と比較すると急激に増加したことがわかる。

各個人がインターネット(以下「ネット」)接続できる端末を所持している状態で震災が起きた場合と、そうでない場合では、対応に大きな違いがあると考えられる。また、SNSの普及も大きな影響があると思われる。情報を正しく受け取る力、メディア・リテラシー教育が求められる。

1.2 学習指導要領における本教材の位置付け

文部科学省の「高等学校学習指導要領解説情報編」の「社会と情報」における目標には「効果的にコミュニケーションを行う能力を養い」とある。それは、「コミュニケーション手段の発達をその変換と関連付けながら理解させるとともに、情報通信ネットワークの特性を踏まえ、情報の受発信時に配慮すべき事項などについて理解させる」ことであると解説している。「情報とメディアの特徴」には「情報の信頼性や信憑性については、他の情報と組み合わせることによってはじめて判断することができることを理解させ、類似の内容の情報についての発信源を整理したり、情報の表現内容や方法の違いを比較したりするといった、情報の信頼性や信憑性を評価する方法について習得させる」とある。つまり「社会と情報」では、情報の信頼性、信憑性の判断の仕方や評価する方法について習得することにも重点を置いている。

「情報の科学」における目標には「情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させる」とあり、それは、「ルール、マナー、情報の安全性などに関する基礎的な知識と技能を習得させるとともに、社会の情報化や情報技術の進歩が人間社会に及ぼす影響を理解させる」ことであると解説している。また、「情報技術の進展と情報モラル」の解説として、「情報社会の発展に主体的に寄与していく態度を育成するためには、単に情報技術を知識として理解させるだけではなく、情報社会で生活する人間に配慮する態度及び様々な問題を解決するための能力や態度の育成が必要になる。また、このような能力や態度の育成を通して、よりよい情報社会を構築しようとする心構えを身に付けさせる」とある。つまり「情報の科学」では、情報技術を知識として理解させるだけではなく、情報社会で生活する人間に配慮する態度を習得することにも重点を置いている。

1.3 メディア・リテラシーと本教材の関連

本論で紹介する実践は「社会と情報」、「情報の科学」の上記の目標に合致している。本実践は、震災が起きたときにSNS等で流れる情報の例を提示し、その情報に対してどういった行動をとるのか、ということ「メディア・リテラシー」の視点から検討させる。メディア・リテラシーとは、(1)メディアの意味と特性を理解した上で、(2)受け手として情報を読み解き、(3)送り手として情報を表現・発信するとともに、(4)メディアのあり方を考え、行動していくことができる能力」と定義する(中橋 2013)。「社会と情報」の「情報の信頼性、信憑性を評価する方法」、「情報の科学」の「情報社会で生活する人間に配慮する態度」を習得することは、メディア・リテラシー能力を育成することにつながると考え、筆者は「震災情報から考える」と題した教材を作成し、実践した。

2. 実践の方法

2016年4月から5月に、東京都立高等学校3年

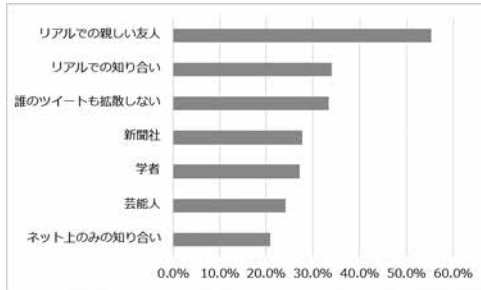


図1 誰の投稿であれば拡散するか(複数回答)

生302名に第1筆者が実践を行った。「情報の科学」の授業において、2時間連続で実施した。授業内容は「情報を見きわめるために大切なことは何か」を考え、生徒間で検討し、さらにプレゼンテーションを作成し発表する実践である。

3. 実践の内容

3.1 Twitter 情報の拡散について考える

「【拡散希望】熊本市内のマンションに閉じ込められている子犬がいるらしい。すぐに救助をお願いしてほしい。住所〇〇〇〇」このような投稿が自分のタイムラインに流れてきたとする。投稿したのが、もし学者だったら、芸能人だったら、新聞社だったら、親しい友人だったら、知り合いだったら、ネット上だけの知り合いだったら、あなたは拡散するか。このような問いを複数回答で回答した。拡散すると回答した者が少ない順に記述すると、ネット上のみの知り合いは20.9%、芸能人は24.2%、学者は27.2%、新聞社は27.8%、誰のツイートも拡散しないは33.4%、リアルの知り合いが34.1%、そして、リアルの親しい友人が最も多く、55.3%であった(図1)。

次に、「拡散したらどうなるか、拡散しなかったらどうなるか」を話し合った。「拡散すると子犬は助かるかもしれない。しかし、情報が間違っていたら誰かに迷惑をかけるかもしれない」「拡散しなかったら子犬は助からないかもしれない。しかし、情報が間違っていたら誰にも迷惑はかけない」以上のような回答を予想していた。そして、実際に生徒からの発表も予想と同じような内容となっていた。

では、情報の真偽はどこで見分ければいいのかだろう。生徒からは「…『らしい』という言葉遣いが怪しい」「『お願いしてほしい』がおかしい、もし本当に救助してほしいなら自分で救援をお願いするはずだ」

などの意見が見られた。そこで授業者は「発信源(情報の出処)が明確であるか、日付や位置情報などの情報は書かれているか」「新しい情報か古い情報かわかるか」などと伝え、さらに「善意であるかあなたが思うか」と問いかけた。そして、「情報を見きわめるために何が必要なか」を生徒に意識させた。また、「このツイートの『らしい』が怪しいかどうかはわからない。素直な気持ちからかもしれない」また「どうしても電話等ができなくて、すがる気持ちでこのツイートで『お願いしてほしい』と書いているのかもしれない」と、わざと反対意見を教員は述べ、生徒はそれを受けて、さらに検討した。そして「しかし、そのようには言うものの、このツイートだけで判断をするのにはあまりにも情報が少ないのだ」と述べた後、「だからこそ、このように様々な解釈ができてしまうのだ」と説明した。

3.2 事実と個人的意見

「事実」と「個人的意見」が混同していないかを考えた。また事実と個人的意見の切り分けは、下村(2015)を参考にした。「〇〇ちゃんは怒った顔をしてこっそり教室を出て行ったよ。感じ悪いね。」というメッセージをSNSを通じて受け取ったと仮定し考察する。このメッセージから事実と個人的な意見であると思うところを書きだし、次に、その文章を生徒が作り直し、その発表をした。

教員からは、「『〇〇ちゃんは教室を出て行ったよ。そして怒ってこっそり出て行ったように、私には思えたよ。もちろんそれは私がそう感じただけかもしれないし、本当に怒っていたかどうかわからないよ。』というメッセージならば良いと思う」と冗談のように伝え、生徒からも笑いが出た。そして「確かに、このようなメッセージであれば、事実と個人的な意見を誰も見分けられるであろう。しかし、実際にこのようなメッセージを書く人はいないと考えられ、多くの人は前述したように、事実と個人的な意見を分けることなく書くであろう」と説明をした。そして「だからこそ事実と個人的な意見の切り分けが必要なのだ」と生徒は気づく契機となり、それが自由記述にも見られた。

この実践から、他人から発信された個人的な意見を事実と認識してしまうことがあることに生徒は気づき、理解をする。この理解から生徒は、事実と個人的な意見を切り分け、情報を見きわめる大切さを

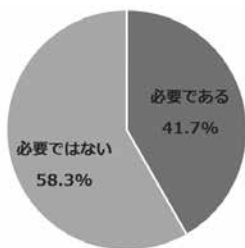


図2 拡散(リツイート)は必要か

学ぶことになった。

3.3 情報を拡散(リツイート)すること

震災時に情報を拡散(リツイート)することの必要性を考えた。最初に自身の意見として「必要である」または「必要ではない」から選ばせた。さらに、その理由を書かせた。生徒の意見では「必要である」とした者は41.7%であり、必要ではないとした者は58.3%となった(図2)。実際には震災時に多くの情報が拡散されたことで、救助がうまくいった例もあれば、情報の錯そうから逆にうまくいかなかった例もある。その事例を最初に示し、どちらが正しいのか、ということを考えさせるのではなく、生徒間で意見をぶつけ合うことで、他者の意見を知り、さらに発表を通じて、他者との考え方の違いを理解するための実践とした。また発表の様子を図3に示す。

「必要である」と考える生徒は、「情報は少なくとも困るよりも、できるだけあったほうがいい」「情報の見きわめをしてリツイートすれば、本当に困っている人を助けることができる」「事実である可能性が少しでもあれば、助かる命なのだから信じるべきだ」といった意見が多く出た。逆に、「必要でない」と考える生徒は、「実はその情報が古く間違えた情報であった時に迷惑がかかるかもしれない」「物資が届きすぎてしまったという事実があると聞いており、震災時にはそのような無駄は許されない」「自分のツイートによって助かる人は少数であり、そのリツイートによって混乱する被災者は多数であるから」「そのリツイートによって、他のツイートの信頼性まで失うのではないか」という意見が出された。「必要である」とする生徒は、リツイートの情報が間違っていたとしても助かる命を優先すべきであるという考えであり、また「必要ではない」とする生

徒は、リツイートの情報が間違っていた時の迷惑やその被害について考えるというものであった。

これらの意見を踏まえて、教員からもう一度、「情報の見きわめ」が大切であるということ伝えた。つまり情報は、①書かれていることをすぐに事実と決めつけない ②事実であるか、それとも個人的な意見であるかを切り分ける ③違う視点で考える ④伝えられていることだけではなく、伝えられていないことは何か、ということを考えることが重要であることを説明した。例えば新聞でもテレビでも、そこで伝えられていることは何か、伝えられていないことは何か、と常に意識して考える訓練を日頃からしておくことが大切であると述べた。

3.4 正しい情報なら拡散してもいいか

「正しい情報ならば拡散してもいいと思うか?」と発問し、その後、ある卒業式の写真を見せた。そこで、このような良い写真をツイートしてきた友人がいたので、この写真を他の友人にリツイートするか、とたずねる。すると「しない」と答える生徒が多く、その理由としては「送った人に許可をもらってからがいいと思う」、「顔が映っているのは良くない」と意見が出された。そこで、①正しい情報であっても迷惑になる場合がある ②不特定多数に見られる可能性による責任がある ③拡散したら回収できないかもしれない ④肖像権を検討する必要性、について説明した。この説明から、生徒は「その情報が正しいからといってリツイートをしてよいわけではない」ことに気づく。さらに「『良い写真』というのも、個人的な主観であり、他人も同じように『良い写真』と思っているとは限らないのである」と述べた後に、「むしろ人によっては『迷惑な写真』となっている可能性がある」と説明を加えた。つまり「人によって情報の捉え方が違うことに気づき、正しいまたは良い情報であるからといって拡散をして良いというわけではない」ということを学んだ(図4)。



図3 拡散(リツイート)の必要性を発表する生徒



図4 生徒に発問する教員の様子

3.5 デマツイートは犯罪になることも

2016年4月に発生した熊本地震直後に、Twitter上で流されたデマツイート(投稿)の例を挙げた。1つ目は、交差点にいるライオンの写真であり、このライオンが地震によって熊本の動物園から逃げたものであるというデマである。実際には外国の写真とされており、さらにこのライオンの写真自体も合成とも言われている。2つ目の写真は熊本市内にあるショッピングモールが焼けているように見える写真である。これもこのショッピングモールが火事であるかのように伝えるデマである。本当は、以前に実施された花火大会の様子を写した写真であるが、文字情報が加わることで火事のようにも見える写真である。生徒からは「こんな写真に騙される人いるのか?」というような意見を発する者もいたが、「確かに我々はこのような写真を見ても笑って終わらせることができるかもしれない。しかし、被災者たちはそのように思えるだろうか。当事者たちはそのような穏やかな感情にないからこそ、こういったデマに騙される人もいれば、騙されていなくとも嫌な気持ちになる人もいるということも忘れてはならない」と解説した。このようなデマを投稿、拡散させることによる社会的責任(刑事罰)の可能性を確認した。例えば、デマを書き込むと「名誉毀損罪」「業務妨害罪」に問われ、民事での損害賠償責任を負うこともある。また、リツイート(拡散)することで、「名誉毀損」や民事での損害賠償責任を負うこともあることも説明した。

3.6 Twitterのハッシュタグの使い方

Twitter社はハッシュタグ(Twitter上で投稿検索のタグとして使われる#マークのこと)「#救助」の使い方を明確に決めている。この使い方を、Twitterウェブサイトで公開されている使用方法を提示しながら確認した。生徒からは「Twitterのハッシュタグに使用方法が決められていることを初めて知った」という意見が聞かれ、投稿を拡散させることが「人命救助に向けた行動に結びつくものであるかどうか」を意識することができた。

3.7 まとめ 情報は情報にすぎない

最後にまとめを以下のように話し、生徒に発問をした。「情報は情報に過ぎない、あなたの経験ではないのだ。ほぼすべての情報は他人によって構成され編集されたものである。しかし、99の嘘の情報

があっても1つの真実で助かる命があるのも事実である。だからこそ、情報の一側面のみを見て判断をするのではなく、情報を見きわめてしっかり受け止めることが大切なのではないか。ネットの投稿や発信は便利であり、現代の情報社会では必要なことである。情報社会を生きる私たちは、情報を受け取ったときに、または情報を送るときに、どのように行動をしていくべきだと考えるか。あなたの考えをまとめなさい。さて、あなたのスマホにTwitterの着信があった。タイムラインにあるメッセージが載せられ、文頭に【拡散希望】とある。あなたはどうか?と説明とともに発問をして、教員の解説を締めくくった。

4. 生徒の意見・感想と考察

授業の実践後に生徒に感想や意見を自由記述として書かせた。自由記述には「拡散をするときには一呼吸おいて、本当に拡散してよいか考えてから拡散する」などがあり、情報の信憑性や信頼性を評価して発信することが今後できるのではないかと期待できる。さらに「情報を発信する際には、自身が良い情報であると考えたとしても、すべての人にそう思ってもらえるとは限らないとわかった」という記述があり、情報社会で生活する人間に配慮する態度とは何かを考える契機とすることができた。

本実践は学習指導要領、さらにメディア・リテラシーの定義に則った能力を育成する内容とした。現在はネットを中心とした、様々なメディアがあり、そこに玉石混交な情報が氾濫しているからこそ、メディア・リテラシー能力は情報社会で生きるために必要な能力となった。情報社会を生きる生徒のために、メディア・リテラシーを育むことは情報を教える教師の役割と考え、今後もこういったメディア・リテラシーの授業を続けていく。

参考文献

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説情報編』(2010年)
- 2) 内閣府『青少年のインターネット利用環境実態調査』(2016年)
- 3) 中橋雄『メディア・リテラシー論』北樹出版(2014年)
- 4) 下村健一『10代からの情報キャッチボール入門——使えるメディア・リテラシー』岩波書店(2015年)
- 5) Twitter社『救助要請 - 電話が使えない時、Twitterで救助を要請』<https://support.twitter.com/articles/20170080#> (最終アクセス日 2016.6.30)